

◆平成 22 年度 第 1 回（通算第 13 回） 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2010 年 4 月 23 日（金）

場所：J221 講義室

22 年度の蔵前ゼミを開催するに当たって

^{にしこり}錦織 経治（1961 窯業）前神奈川県支部長，元旭硝子専務

教室が溢れた。授業科目「企業社会論」との連携の効果は予想以上に大きいようだ。192 名収容の J221 講義室に補助イス 60 近くを追加したが、それでも足りず立ち見がでた。錦織さんをはじめとする蔵前ゼミの関係者も感慨深かったに違いない。現支部長の関口さんが年度初めの挨拶をされる予定だったが、急な外国出張が入って前支部長の錦織さんに代役が回ってきた。錦織さんが一番心配なのは、母校が「課長養成大学」と陰口をたたかれていることだ。世界有数の理工系大学を目指している本学にとっては信じ難い話だが、冷静に現実を分析する必要がある。本学は就職力による大学ランキングではトップだ。第一希望の企業に勤める人が多い。ところが、20 年、30 年後となると、一橋大学の方が上級管理職になる人の割合が多くなる。これには一橋大学の同窓会である「如水会」の高い組織率と同窓会が世話をする「一橋ゼミ」等による同窓生ネットワークの力が大きい。入社直後は技術力で勝負できる面もあるが、職位が上がれば上がるほど人の活用術がものをいう。このように分析した錦織さんは、本学の同窓会である蔵前工業会の神奈川県支部長だった 2 年前に同志を募って「蔵前ゼミ」を始めた。ようやく軌

道に乗り始めたところだ。「人の活用術」を学び、後輩に受け継いでいくためにも蔵前工業会に入会しよう（VISA Gold Card の特典が付く）。

先生方へのお願いもあった。学生が研究室から巣立つときに、「おめでとう。よく頑張ったな」に加えて、「蔵前への入会手続きは済んだか」とカード会員になるように是非勧めしてほしいとのことだった。先生の勧めとあれば効果は絶大だ。また、本学の教員であれば出身大学を問わず会員になれるのもいい点だ。

錦織さん自身も、2009 年度の第 1 回目（通算 6 回目）に講師として話をしておられるので、その時の印象記も参照していただきたい。印象記には、錦織さんが後輩に伝えたい 10 カ条も記してある。とにかく、「明るく 元気で 失敗しても OK 精神でいこう」とのことだった。

ゼミの後の交流会では、ジョッキ片手に、講師や諸先輩たちと気楽に話ができるのも魅力だ。これが入社後となると、幹部と話せるようになるのは 15 年後ぐらいだそうだ。

放送の役割

^{げんいち}橋本 元一（1968 電子）元 NHK 会長

会長ぶらずに会長らしく、教授ぶらずに教授らしく、東工大生ぶらずに東工大生らしく、この「ぶらずにらしく」が橋本さんからの私たちへの贈り物だ。高い地位は何のためにあるかと考えるとよくわかるのだが、人の心には名誉欲もあるので簡単にはいかない。しかし世の中よくしたもので、ぶりたい人が社長になるのは小説の世界ぐらいになりつつある。ぶりたい一心で頑張ってくれば、いい仕事に結実することも多いから、結果的には悪くはない。問題なのは、社長なのに社長らしい仕事をしないケースだ。首相なのに首相らしい仕事をしない……と書きながら、教授なのに満足に教授らしい仕事できていないわが身を省みた。どうだろう、聴衆だった学生の皆さんは東工大生らしく血のにじむような努力をしているだろうか。「ぶらずにらしく」には、そのポストが到達点ではないという意味も込められている。

東工大に入ることや社長になることがゴールではなく、新しい出発点と考えるなければいけないのだ。

橋本さんの話は 2 部構成だった。第一部「放送の役割」では、放送の歴史が簡潔に紹介され、将来の展望が語られた。歴史的な一枚として、大先輩の高柳健次郎さん（TV の父）がちょうど大正から昭和への変り目の時にブラウン管による映像の電送・受信に初めて成功した時の記念すべき写真も紹介された。約 100 年前のモールの無線電信に始まり今やデジタル化の波が押し寄せている。なぜデジタル化するのか 私自身はよく理解できていなかったが、(1) 急速に普及しつつある携帯電話に電波の帯域を譲り、(2) 電子産業の振興に寄与し、(3) 走査線が 5 倍の高画質映像を提供し、(4) 画面分割でマルチ編集を可能にし、スポーツ中継の延長や災害時の緊急事態に対応できる

ようにし、(5) 高齢者・障害者向けの対応も可能にするなどのメリットがあるようだ。弱点もある。デジタル化するのに数秒の遅れが出るそうだ。電波が弱いと急速に画像が劣化するのもデジタル方式の弱みだ。橋本さんの話を聞いて、ワンセグという言葉に対する違和感もなくなった。そろそろ、旧式の携帯電話をやめ、自宅の TV もアナログからデジタル式のものに買い替えるかという気になった。それにしても、今日本にある1億台近いアナログ TV がもうすぐすべて廃品になるわけだが、行き場がないのだそうだ。回収に値する貴金属がほとんど使われていない上に、発展途上国に中古品として輸出することもできない(放送の方式が違うので使いものにならない)。日本と同じ方式を採用しているのはブラジルを中心とする南米の一部だけだそうだ。

インターネットがここまで普及すると「TV 放送はもうすぐ役割を終えるのでは？」と心配になるが、災害国日本を考えるとインターネットが寸断されても機能する一斉同報性の公共放送システムは不可欠だ。国営ではクーデター等の政治的な緊急時に対応できないので NHK のような中立の公共放送はなくてはならない。このように公共放送の使命にも触れつつ、私たちの活動には変えなければならないもの(手段)と変えてはいけない部分(志・精神)があることを心にとめておいてほしいとのことだった。

意外だったのは「放送」という言葉の由来だ。「送り放し」を逆にして「放送」という言葉を作ったのだそうだ。こういわれても無責任な響きがしないから不思議だ。関係者が責任を持って仕事をしてきたからに違いない。

第二部は、「皆さんの成功のために」と題して、本稿の冒頭のような話をされた。橋本さんは、技術畑出身の最初の NHK 会長だ。歴代の会長は番組系から選ばれていた。それなのにどうして技術畑の橋本さんが？と誰もがきいてみたくなるが、訊き方を間違えると失礼になるので難しい。学生の一人が「どうしたら NHK の会長になれるのでしょうか…云々…」と恐る恐る質問をした。答えは実に簡単だった：「まじめで正直。東工大出身なら悪いことはしないとされたのでしょ」。橋本さんは「ハイビジョン」の名付け親であることからわかるように、専門分野での力量に加え、まじめで正直なのだ。それゆえ「橋本ならば、会長**ぶ**らずに会長らしい仕事をしてくれるに違いない」と、NHK 経営委員会の人たちの信頼を得たのだ。

世の中は「安全・安心」を求めている。橋本流に言えば、人も同じだ。こいつに任せておけば大丈夫となって一人前。(1) 上司の指示をこなせる、(2) 上司の意向を汲み取れるなどは序の口で、(3) 論理的に立案・提言し上司や組織に寄与できる、そして最終的には(4) 経営に資する企画に参画できるようになってほしいとのことだった。橋本さんが評価され、信頼され、仕事を任されるようになったのは、論理的に立案・提言・実行したからのようだ。言葉でいうと難しそうだが、実際には、提案したりされたりしたときには「それはいつまでに出来るの?」「どれぐらいの費用と労力がかかるの?」と極当たり前の詰めをしていけばいいらしい。文系の人たちにはこの時間軸が欠けているから、「いつまでに」を身につけてさえいれば立派に東工大卒としてやっていけるとのことだった。政治家が「平和な暮らしを実現します」といっても時間軸が欠けているのでほとんど意味がないし、「5月までに決着します」といっても論理性・具体性に欠ければ信頼を失うだけだ。これらの例え話から分かるように、「いつまでに」を使いこなすのは実は思った以上に難しいのかも知れない。私は「段取り」を大切にしてきたが、橋本さんの「いつまでに」という時間軸の概念と相通じるものがあり嬉しくなった。

電子工学科を卒業して張り切って NHK に入社した橋本さんを待っていたのは、放送技術研究所ではなく、全国各地の基地局建設の土木工事だった。基地局を設置するのに適した場所を譲ってもらう交渉もしたそうだ。こういう交渉は、最後は人間性の勝負となる。「人に優しく自分に厳しく」という橋本さんの日常規範はなかなか真似のできるものではないが、「小説や先輩から失敗を習いなさい」というのは真似できそうだ。「どのような小説を読まれたのですか?」という質問に答えて曰く：「あらゆるジャンルの雑読でした」。堀辰夫、太宰治、司馬遼太郎、藤沢周平、星新一に加え、漫画「カムイ伝」の白土三平の名前も挙がった。志を実現するためには、相手の立場を理解する努力(それには自信がないとできないので自分を磨く必要があること)と自分を理解してもらう努力(信頼)が大切だという助言も忘れまい。本題から外れるが、NHKには年間750~760万件の電話やFaxが寄せられ、そのうちの60%が再放送の希望だそうだ。私自身は今のところゆっくりとTVを見る暇がないが、そんなに人気があるならば、老後の楽しみはNHKということになりそうだ。